

Internet Week 2018

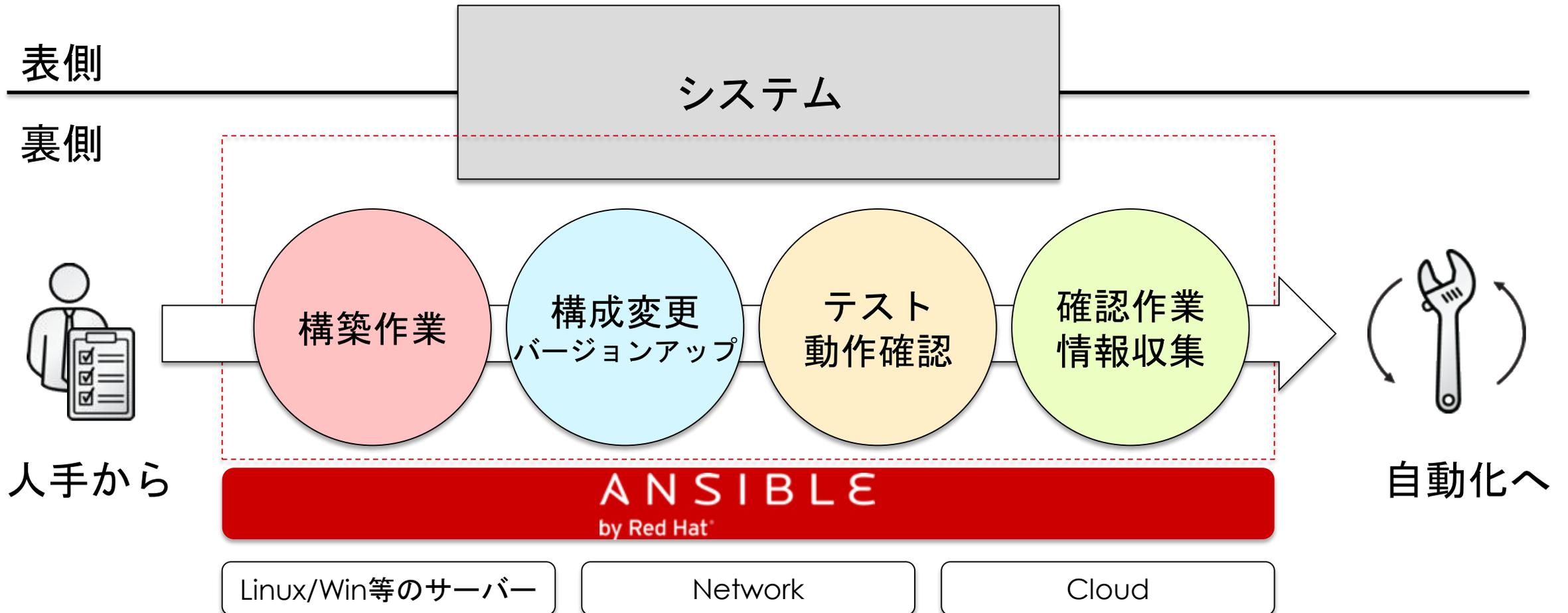
IT Automation with Ansible

2018/11/29 - v1.0

Red Hat

Ansible Automation の役割

- ITを動かすためのITの仕組み「**IT Automation**」を実現する。

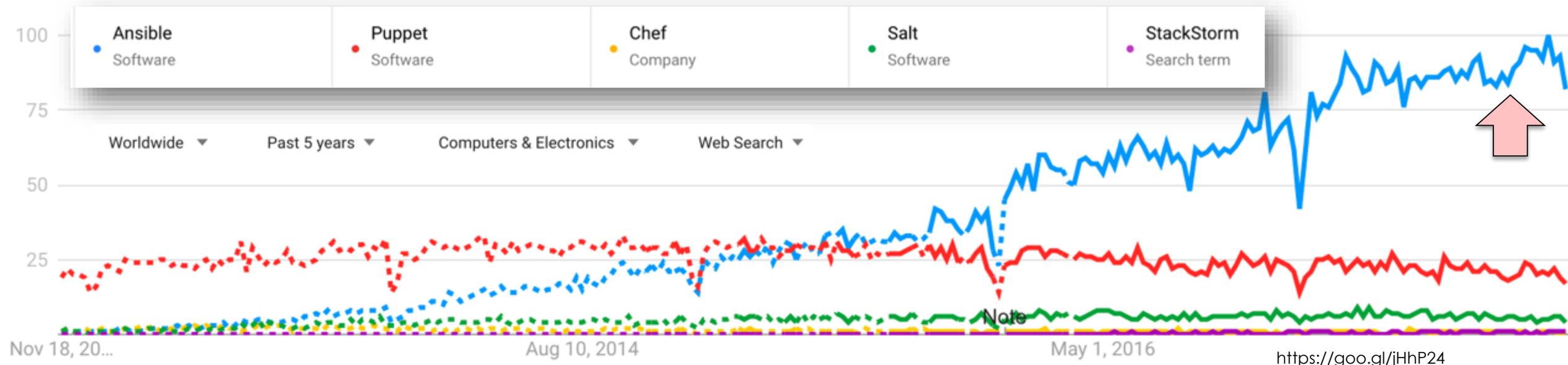


市場での状況

2,500+
contributors

10,000+
downloads/day

1250+
modules included
(including 250+
Networking modules as
of April 2017!)



Ansible が広く利用される背景 (1)



SIMPLE

誰もが読める
標準化された
自動化言語

Playbook



POWERFUL

多様な制御対象を
統一的手法で
自動化

Modules



AGENTLESS

セキュアで
信頼性の高い設計

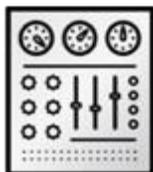
Architecture

Ansible が広く利用される背景（2）



組織として自動化に取り組むためのツール

- 自動化の仕組みを広範囲で活用し効果を最大化する。
- 属人性を排除し、継続的な改善を可能とする。



システムとして自動化を組み込むためのツール

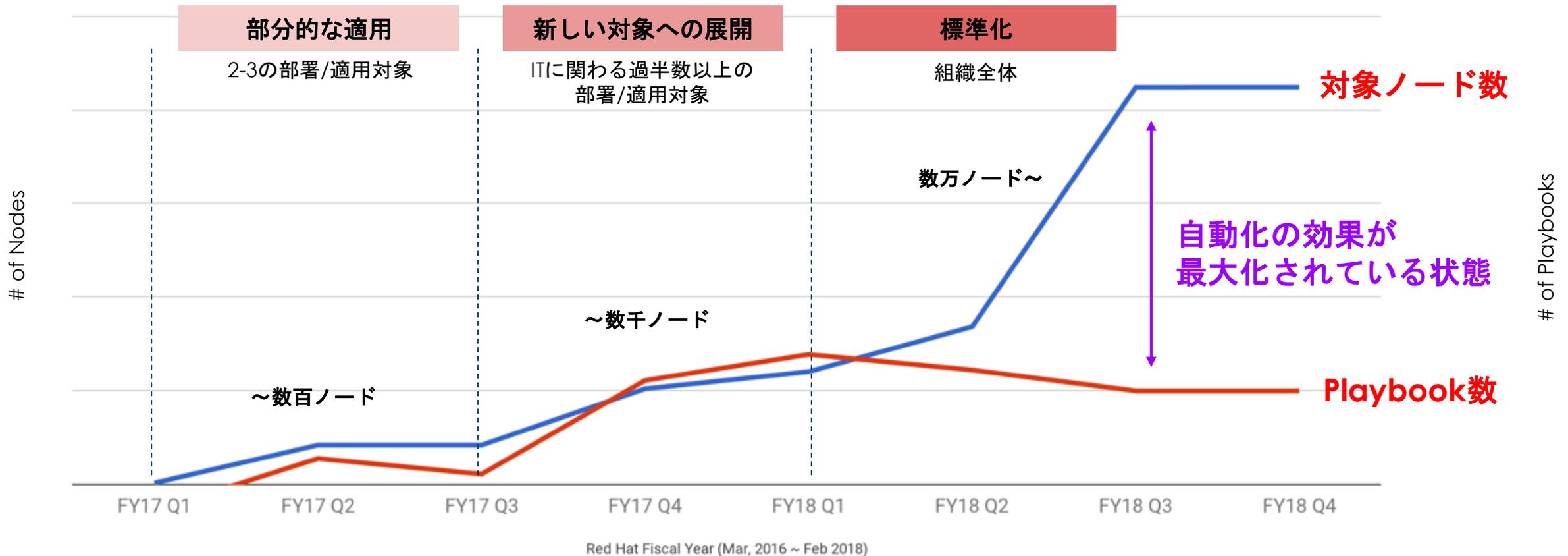
- 自動化をサービス化（機能化）する。
- API連携しシステムの一部として自動化を組み込む。
- 末端の操作を抽象化し、自動化するためのコストを削減。



開発数（Playbook数）と適用ノードの関係イメージ

- Ansible Automation は「組織としての自動化」を強力に推進。

2016年3月～2018年2月



Ansible は作業の部品化と再利用が可能

文書No	123-4567890-A	作成者	最終更新者	承認	確認	作成/更新
文書名	XXXX作業手順書	T.N	R.K	印	印	印
		作成日	最終更新日			
		2017/12/XX	2018/2/YY			

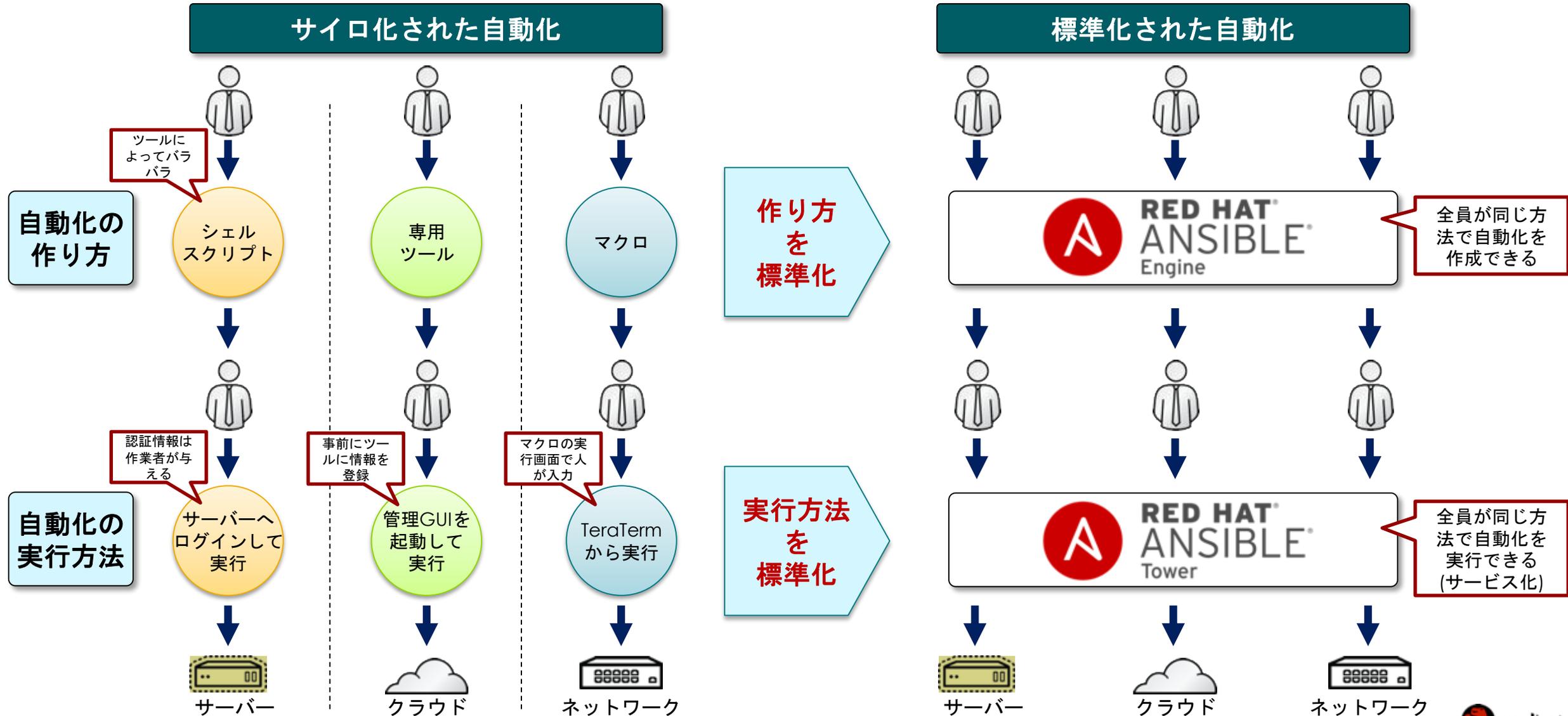
作業No	作業概要	作業内容	実施者	実施日時	確認者
1	作業前確認	作業端末を起動し以下のユーザーでログインを行う。 ユーザー：xxxxxx パスワード：パスワード管理票を参照 ログイン後に、作業端末のデスクトップに「XXX」フォルダを確認する。			
2	作業対象へ接続	作業対象「SSH」へ SSH ログインする。 ターミナルソフトを起動して、以下を入力。 \$ ssh ops@192.168.xx.yy password: \$ hostname target_node ホスト名がターゲットのノードであれば作業を継続する。			
3	yyyyyy	AAAAAAAAAA BBBBBBBBBB CCCCCCCCCC DDDDDDDDDD			

作業全体は特定のシステムにしか使えない
オンリーワンの手順書だが・・・

個別の作業要素の大部分は
共通化可能なものが相当数存在する。

ある会社では、自社の手順書を精査しと
ころ、7割前後が「いろいろ確認して最
後にプロセス/サービスの再起動」を行
う手順書だったという話もあります。

Ansible は「自動化手法の標準化」を実現



自動化のもたらす効果

Before

After

アプリケーションのリリース作業

通信業

200時間

定期的に行われるアプリケーションのリリース作業を自動化して**90%の工数を削減**

20時間

プライベートクラウドの資源払い出し作業

情報サービス業

12日 (リードタイム含む)

リソースの払い出しを自動化し、**大幅なスピードUPを実現。**

10分

仮想化基盤の全運用作業

社会インフラ

100%

日常的な運用作業を自動化することで**全工数を半減**。削減した工数を新たな仕事へシフト。

50%

大規模クラウドサービスの運用作業

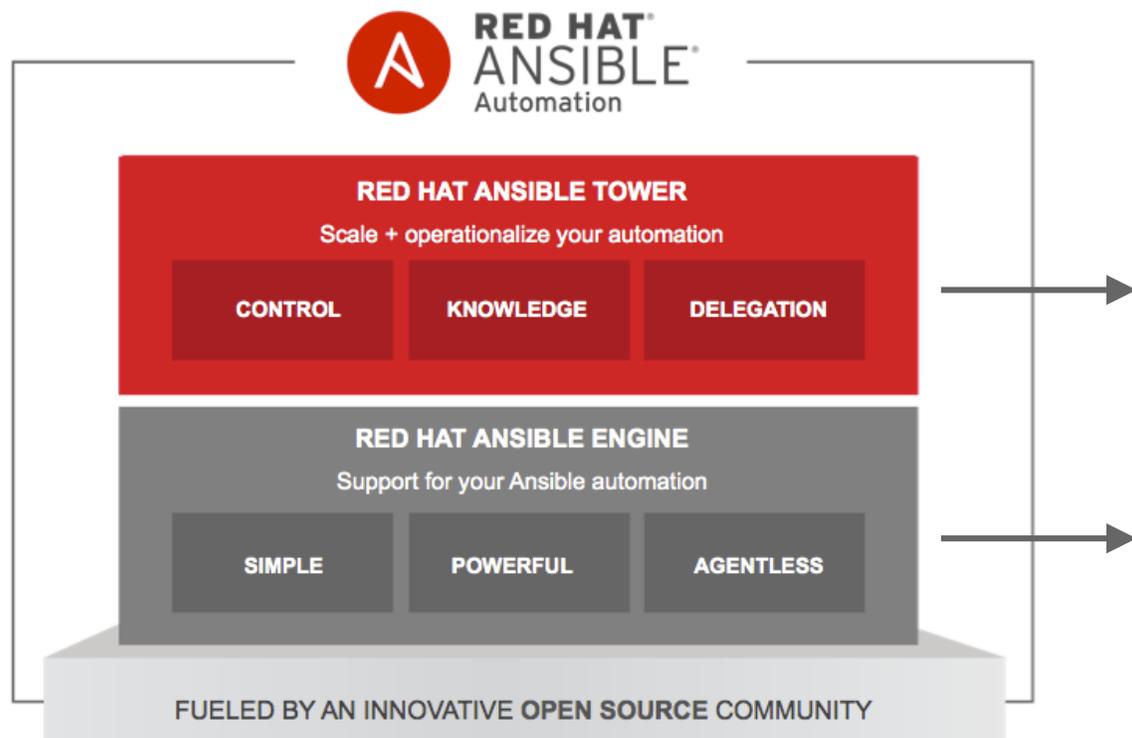
情報サービス業

60時間

クラウド基盤のメンテナンス作業を自動化して**大幅な時間短縮を実現し、オペミスも削減。**

10分

Ansible Automation の全体像



分類	コミュニティ (誰でも利用可能)	エンタープライズ (レッドハットが提供&サポート)
自動化プラットフォーム (GUI/REST API/ 権限管理/ 実行履歴管理など)	AWX Project	Ansible Tower <small>(*1)</small>
動作エンジン (コア、モジュール)	Ansible Project	Ansible Engine <small>(*2, *3)</small>

*1) 評価版のライセンス提供あり

*2) モジュールのサポートはコアに限定

*3) Network Moduleのサポートとして、Red Hat Ansible Automation (Networking) を提供

Ansibleによる自動化の進め方（小さく初めて大きく育てる）

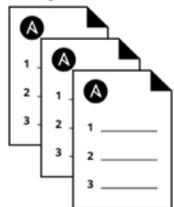
単純に手順を置き換える
(簡単な箇所から小さく部分的な自動化)

置換

パラメータシート

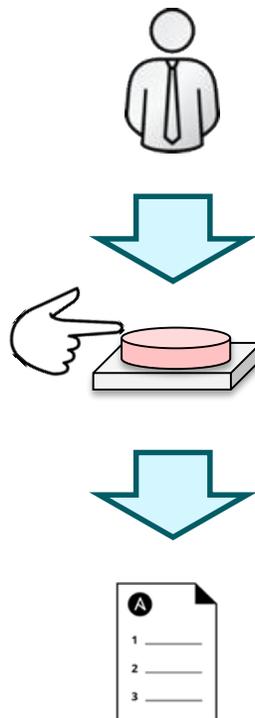


Playbook



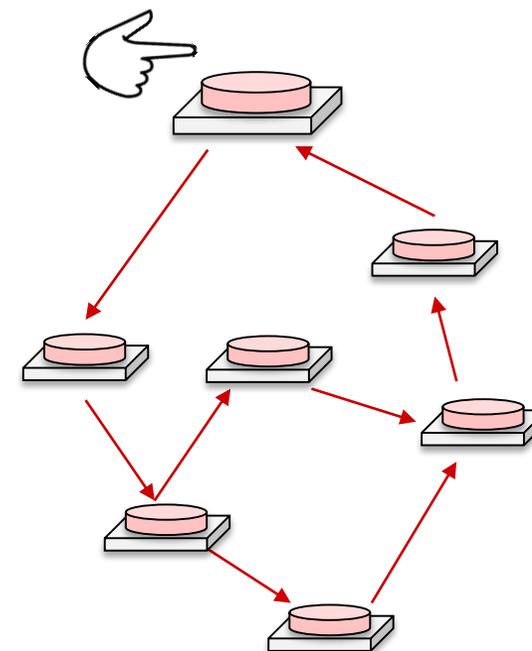
自動化を機能化して
別の人に実行してもらう

機能化（サービス化）



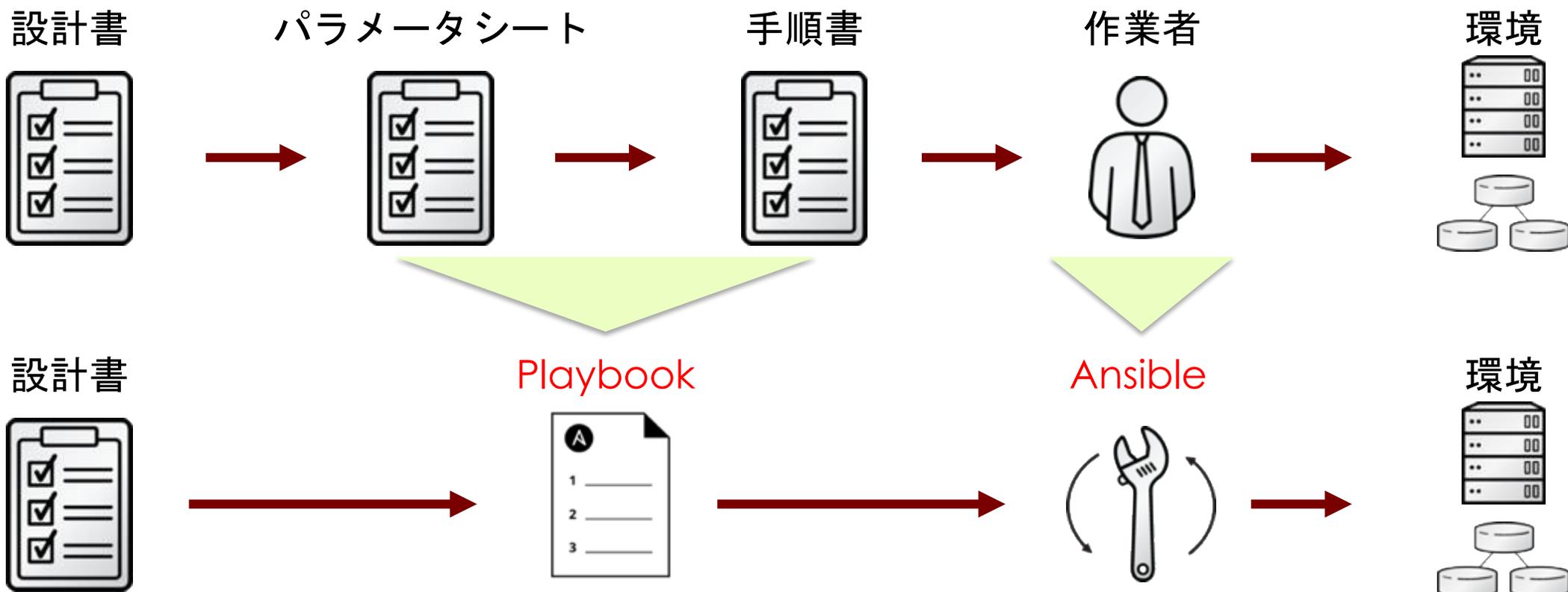
小さな機能を連結して
大きな機能を作る

連結



手順書の置き換え

- 現行の手順をPlaybookとして置き換え自動化する。
 - Playbook は実行可能なパラメータシート兼手順書として利用できる。



自動化を記述する「Playbook」

- YAML 形式で記述されたパラメータと手順

```
---
- name: install and start apache
  hosts: web
  become: yes
  vars:
    http_port: 80

  tasks:
    - name: httpd package is present
      yum:
        name: httpd
        state: latest

    - name: latest index.html file is present
      copy:
        src: files/index.html
        dest: /var/www/html/

    - name: httpd is started
      service:
        name: httpd
        state: started
```

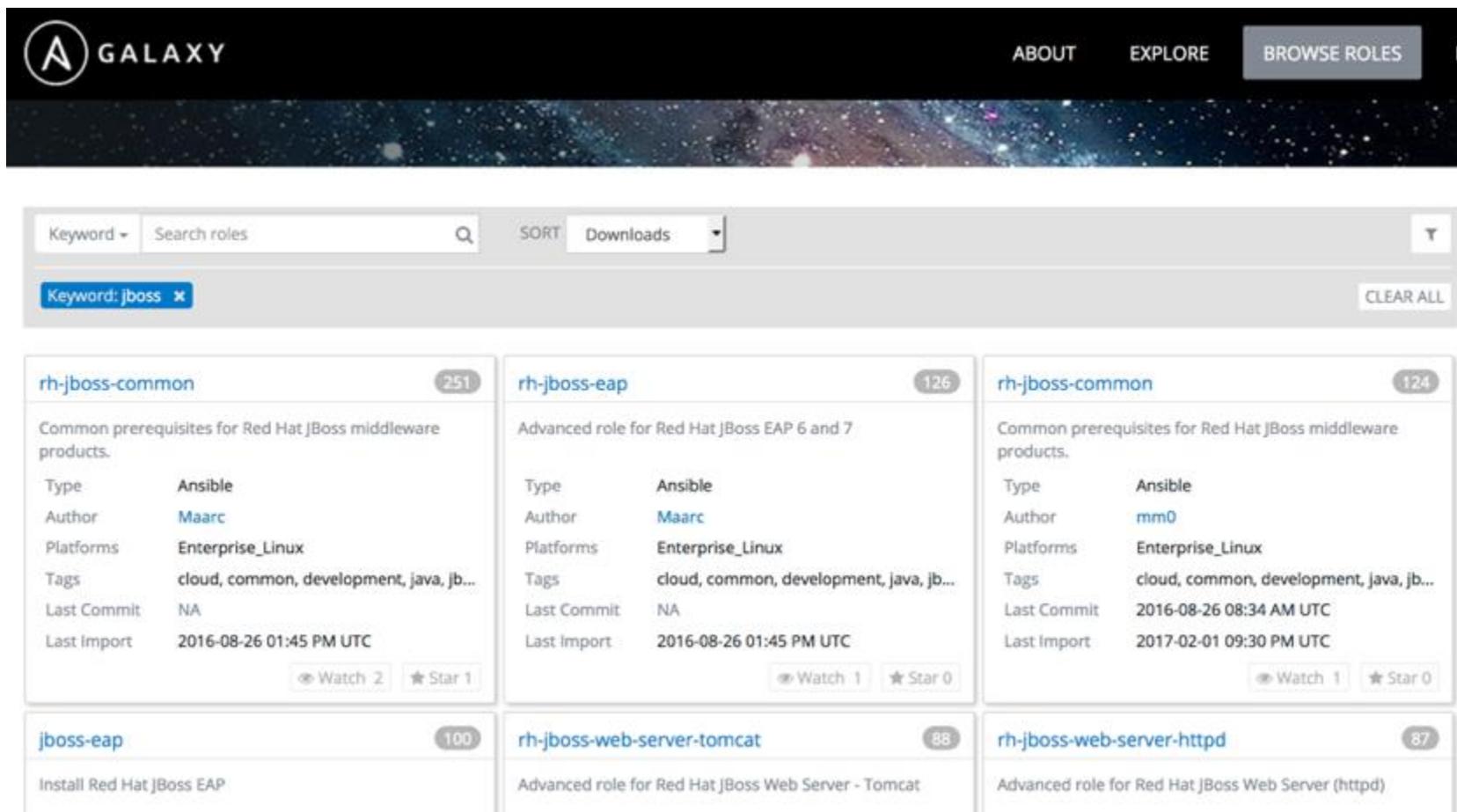


「コード」なので、コーディング規約の準拠などをプログラムでチェック可能

	A	B	C	D	E
1					
2	1	name	install and start apache		
3	2	hosts	web		
4	3	become	yes		
5	4	vars			
6	5		http_port	80	
7	6	tasks			
8	7		name	httpd package is present	
9	8		yum		
10	9			name	httpd
11	10			state	latest
12	11			name	latest index.html file is present
13	12			copy	
14	13			src	files/index.html
15	14			dest	/var/www/html/
16	15			name	httpd is started
17	16			service	
18	17			name	httpd
19	18			state	started
20					

集合知の活用

- インターネット上に多数のPlaybookが公開されており、**ゼロからの試行錯誤を省く**ことができる。



The screenshot shows the Ansible Galaxy website interface. At the top, there is a navigation bar with the 'GALAXY' logo and links for 'ABOUT', 'EXPLORE', and 'BROWSE ROLES'. Below the navigation bar is a search bar with the text 'Keyword Search roles' and a search icon. A dropdown menu shows 'SORT Downloads'. A search filter is applied, showing 'Keyword: jboss'. Below the search bar, there are six role cards displayed in a grid. Each card shows the role name, a description, and metadata such as Type, Author, Platforms, Tags, Last Commit, and Last Import. The roles shown are:

- rh-jboss-common** (251 downloads): Common prerequisites for Red Hat JBoss middleware products. Author: Maarc.
- rh-jboss-eap** (126 downloads): Advanced role for Red Hat JBoss EAP 6 and 7. Author: Maarc.
- rh-jboss-common** (124 downloads): Common prerequisites for Red Hat JBoss middleware products. Author: mm0.
- jboss-eap** (100 downloads): Install Red Hat JBoss EAP.
- rh-jboss-web-server-tomcat** (88 downloads): Advanced role for Red Hat JBoss Web Server - Tomcat.
- rh-jboss-web-server-httpd** (87 downloads): Advanced role for Red Hat JBoss Web Server (httpd).

<https://galaxy.ansible.com/>

テストの自動化

- 構築の**正しさを検証**
 - 想定した状態になっているかの確認
- インフラの**結合テスト**
 - 複数機器やOSにまたがるテスト
 - 人では実現できない網羅的なテスト
- 何度でも**コストゼロ**で繰り返せる
 - テストが蓄積されるほど品質が向上
 - 自動化導入当初はテスト項目10個。
 - 1年後には100個。
 - 人では不可能なテストの実施
 - 100個のテストを100台のサーバーへ実施。
 - 構築後だけでなく、バージョンアップや構成変更のたびに実施。

tasks:

```
- name: 対象サーバーのポートがOpenしているか
  local_action:
    module: wait_for
    host: "{{ inventory_hostname }}"
    port: 80
    state: started
    delay: 3
    timeout: 10

- name: ゲートウェイにping送信可能か
  shell: |
    ping -c 3 {{ ansible_default_ipv4.gateway }}

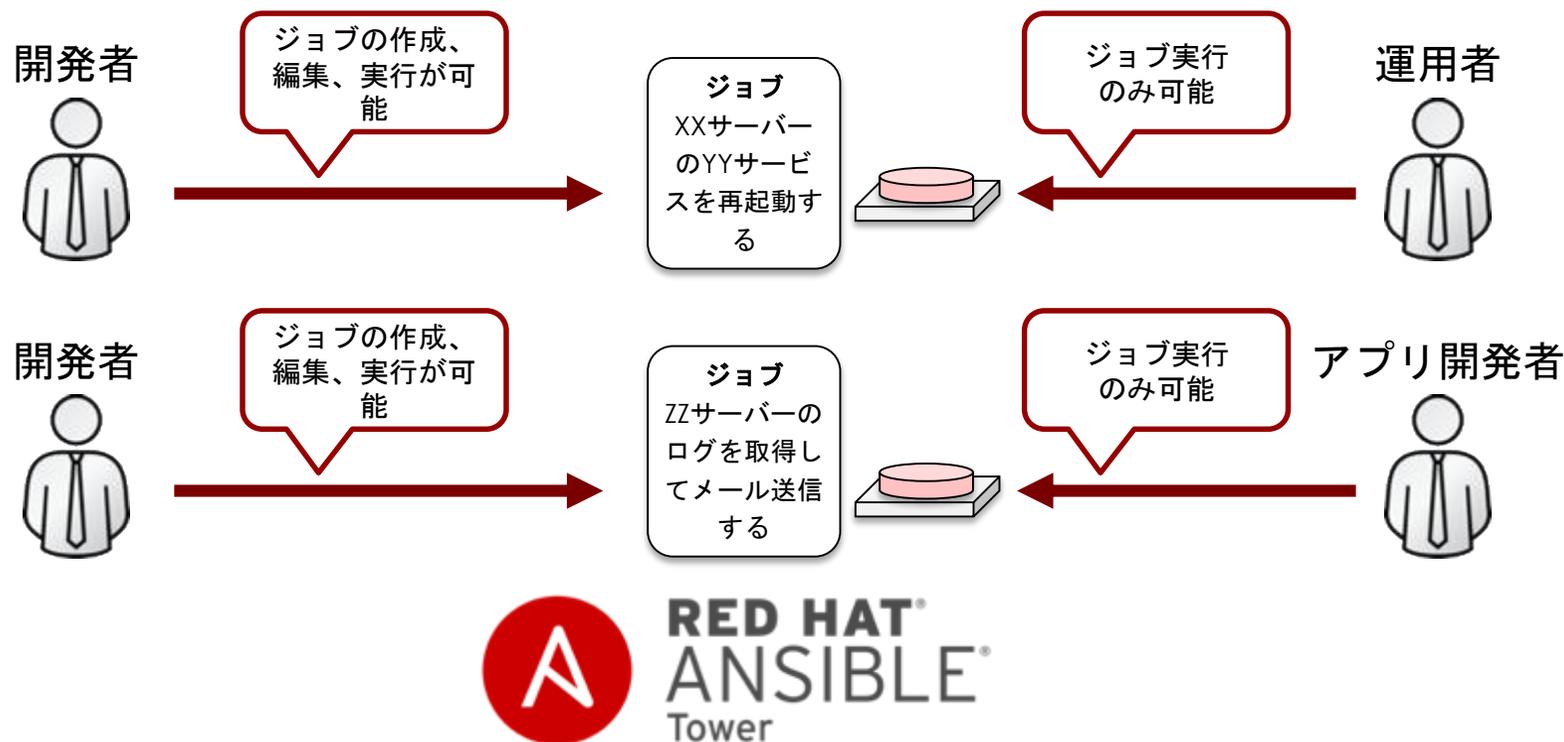
- name: コンテンツが配布されているか
  shell: |
    test -f /var/www/html/index.html

- name: コンテンツがHTTP経由で取得できるか
  local_action:
    module: uri
    url: http://{{ inventory_hostname }}/
    validate_certs: no
    timeout: 5
    return_content: yes
    register: webpages

- name: TEST check contents
  assert:
    that:
      - (webpages.content | search(query))
  vars:
    query: "{{ content_msg }}"
```

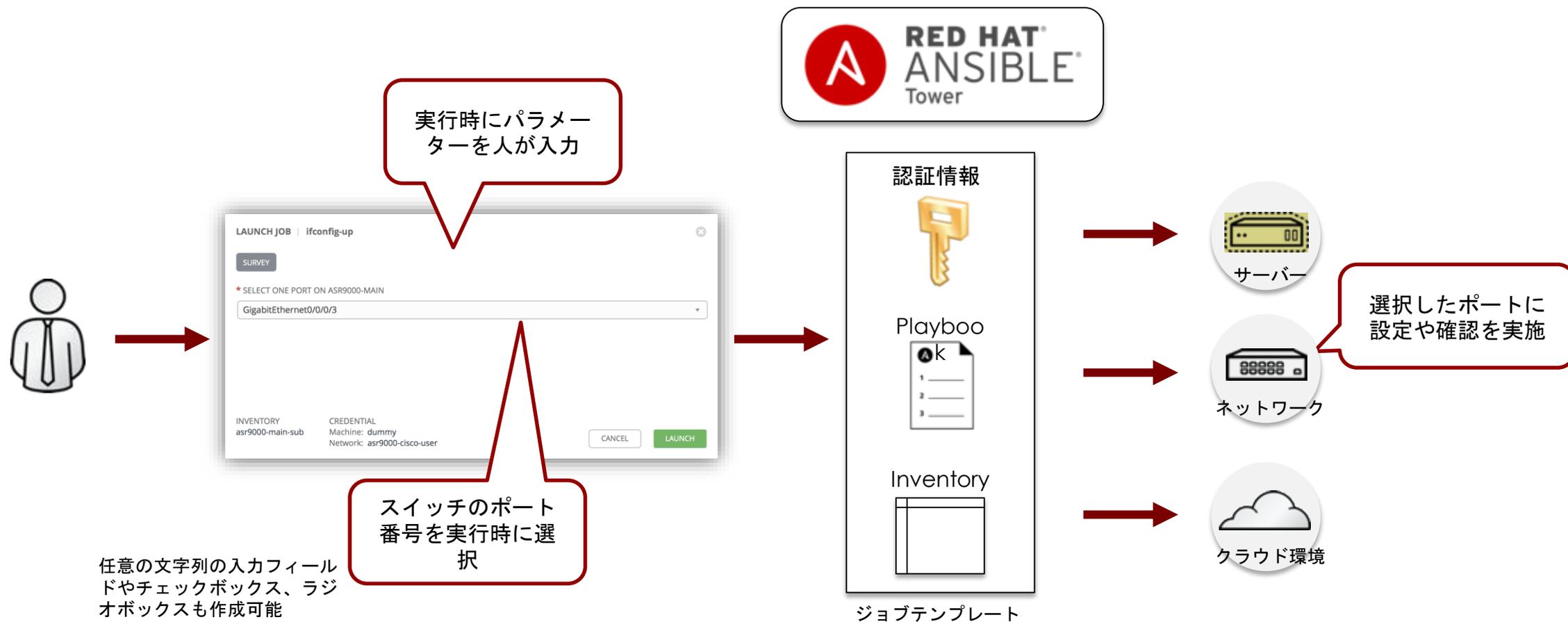
オペレーションの委託（サービス化）

- 作成した自動化の権限を移乗することが可能。
 - オペレーターにサービスの自動再起動の操作「だけ」を実行「だけ」させたい。
 - アプリ開発者にサーバーの自動ログ収集の操作「だけ」を実行「だけ」させたい。



簡易セルフサービスポータル

- 実行時にジョブテンプレートに対して、パラメーターを与えるGUIを作成可能。



共通化、組み合わせによる自動化の実現

- パーツ化したPlaybookを共有・連結し、**大きな自動化を低コストで実現**

OpenStack上にサーバーを構築

```
- name: launch an instance
os_server:
  state: present
  name: vm1
  availability_zone: tokyo
  image: RHEL7.3
  key_name: my-key
  timeout: 200
  flavor: m1.medium
```



ワークフローをGUIから構築可能

AWSにサーバーを構築

```
- name: launch an instance
ec2:
  key_name: mykey
  instance_type: t2.micro
  image: ami-123456
  wait: yes
  group: webserver
  vpc_subnet_id: (略)
  assign_public_ip: yes
```



ソフトウェアを設定

```
- name: install httpd
yum:
  name: httpd
  state: latest
  become: true
```



設定のテスト

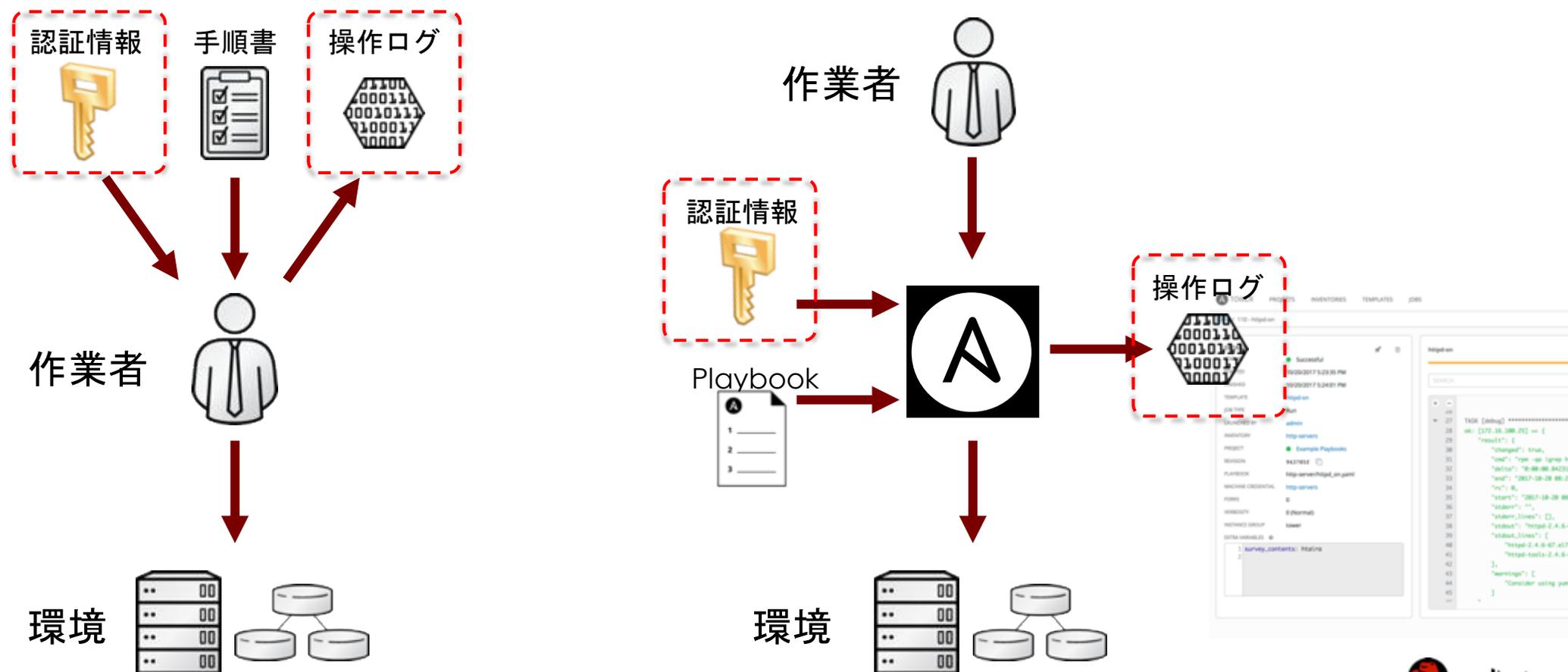
```
- name: TEST wait for HTTP port up
local_action:
  module: wait_for
  host: "{{ inventory_hostname }}"
  port: 80
  state: started
  delay: 3
  timeout: 10
```



環境に依存せず共通化して利用可能

作業者と認証情報の分離によるセキュリティの向上

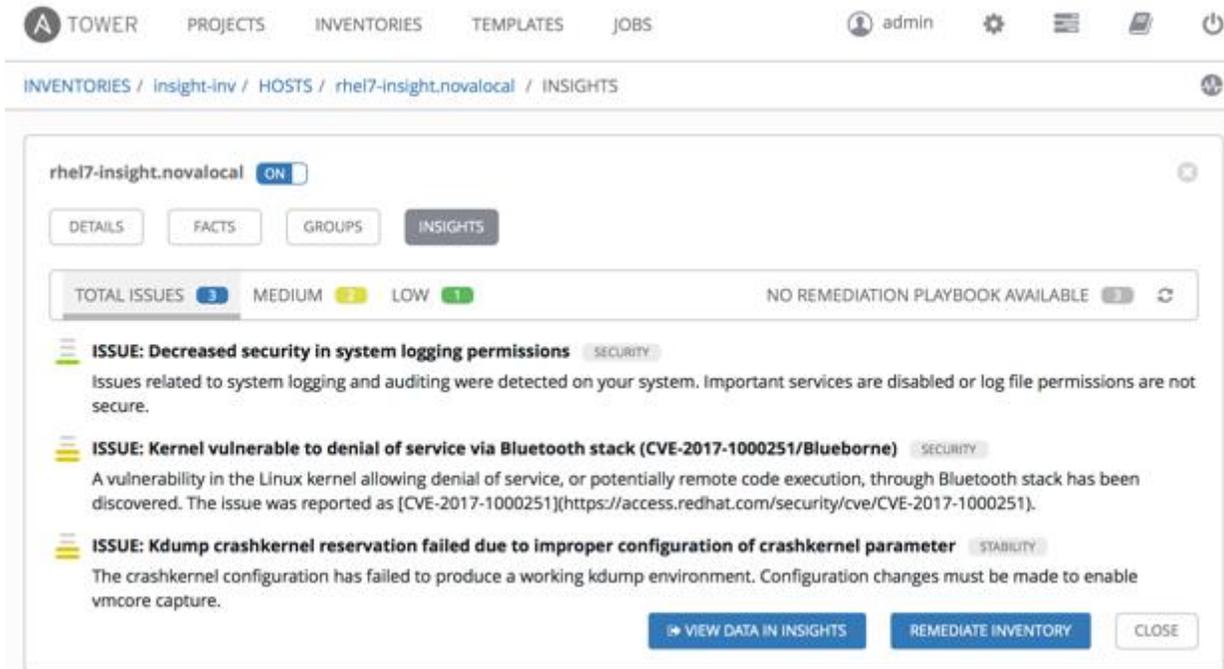
- 認証情報を暗号化して作業者に対して隠蔽します。
- 作業内容はPlaybookとして履歴管理され、「いつ」「誰が」「何を」「どこに」実施したかを記録します。



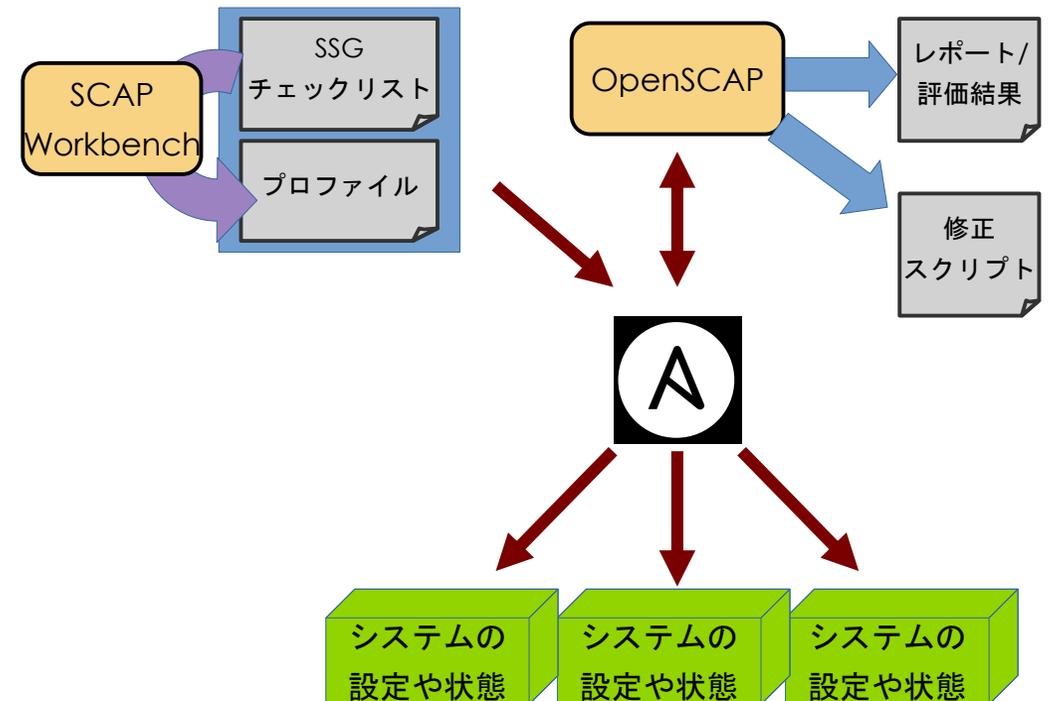
定期的な安全性・適合チェック

- Red Hat Insights 連携で既知の脆弱性、複数の設定間の齟齬、既知の問題がある設定などを検出し、修正Playbookを提供。
- OpenSCAPと組み合わせた脆弱性診断やポリシー（PCI-DSS準拠など）チェックの実施。

Insights 連携による脆弱性一覧

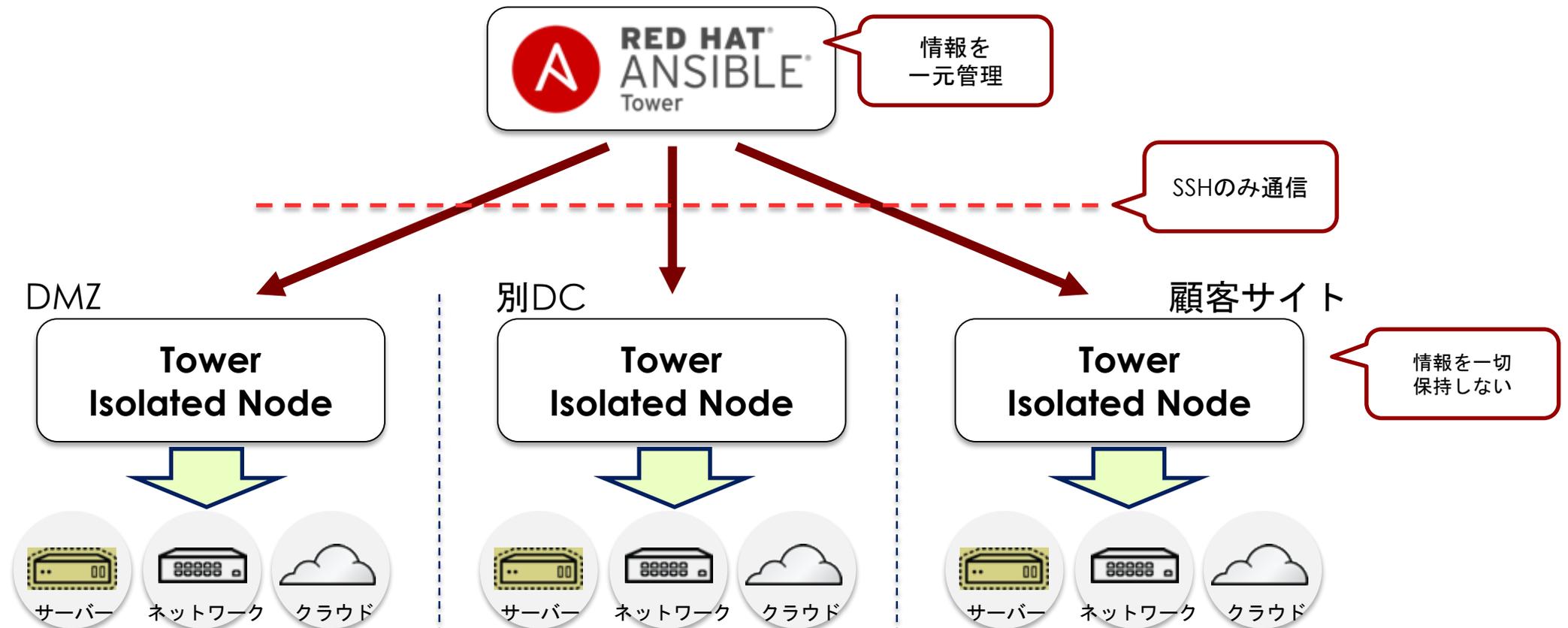


OpenSCAPとの組み合わせによる脆弱性診断



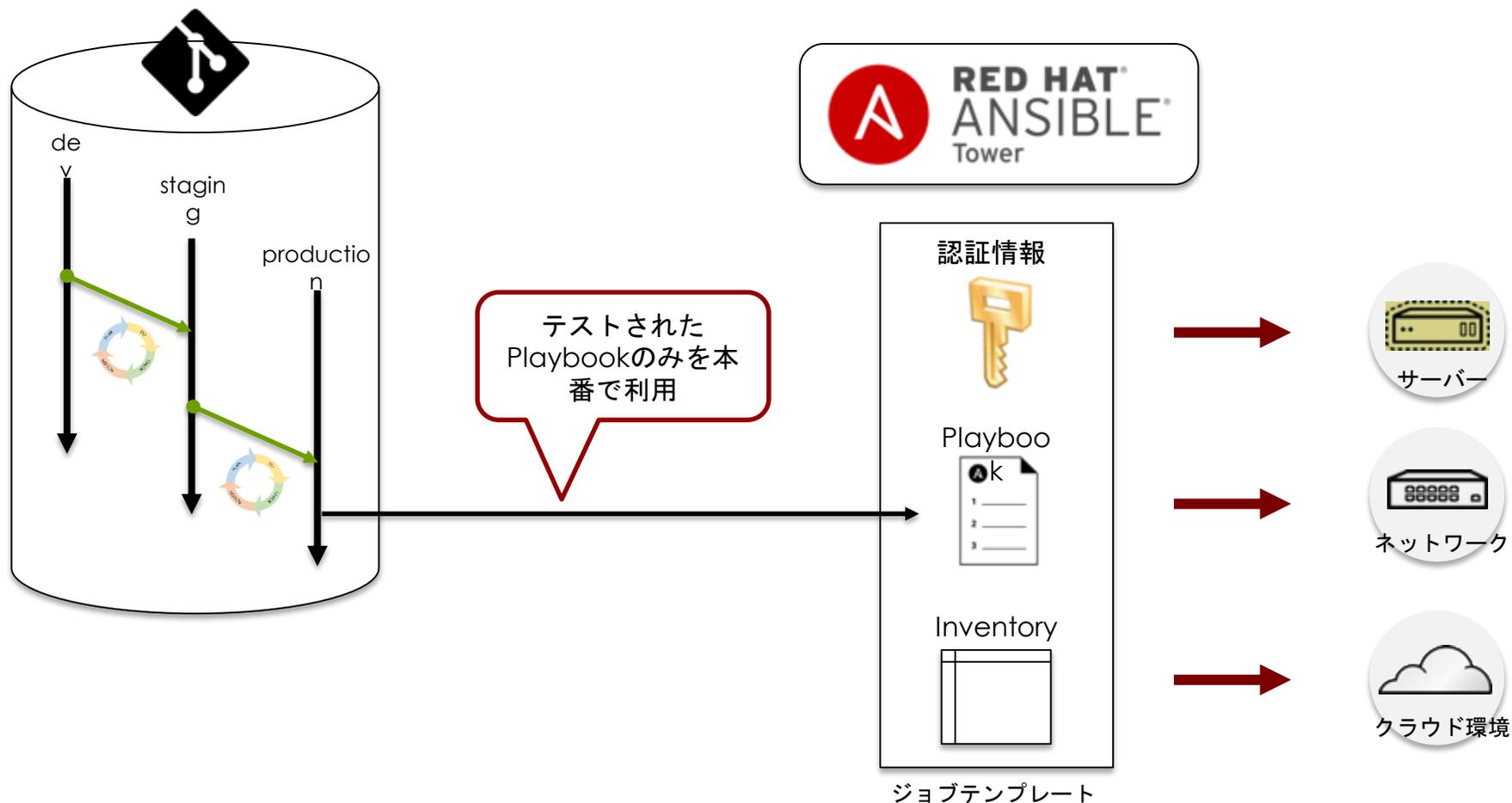
リモートの自動化環境を安全に一元管理可能

- Isolated Node 機能を使うと、地理的に離れた場所での自動化を一つの Tower から実施できるようになります。



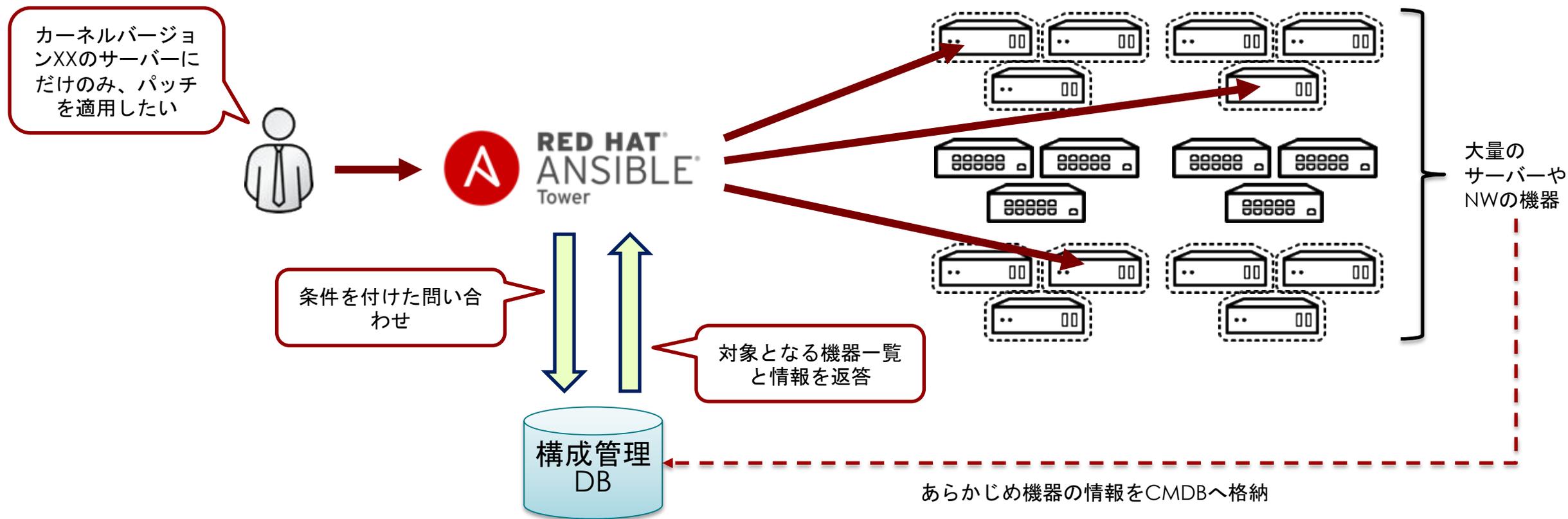
SCM連携

- バージョン管理されていない野良Playbookや、CI等による品質管理の連携が可能。

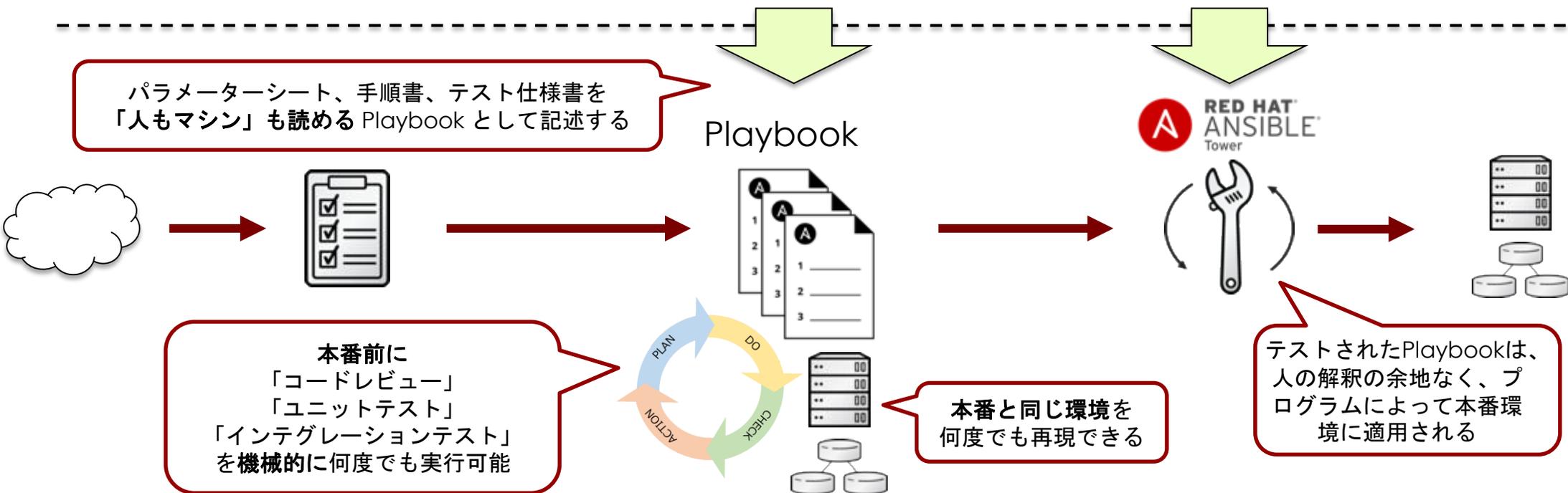
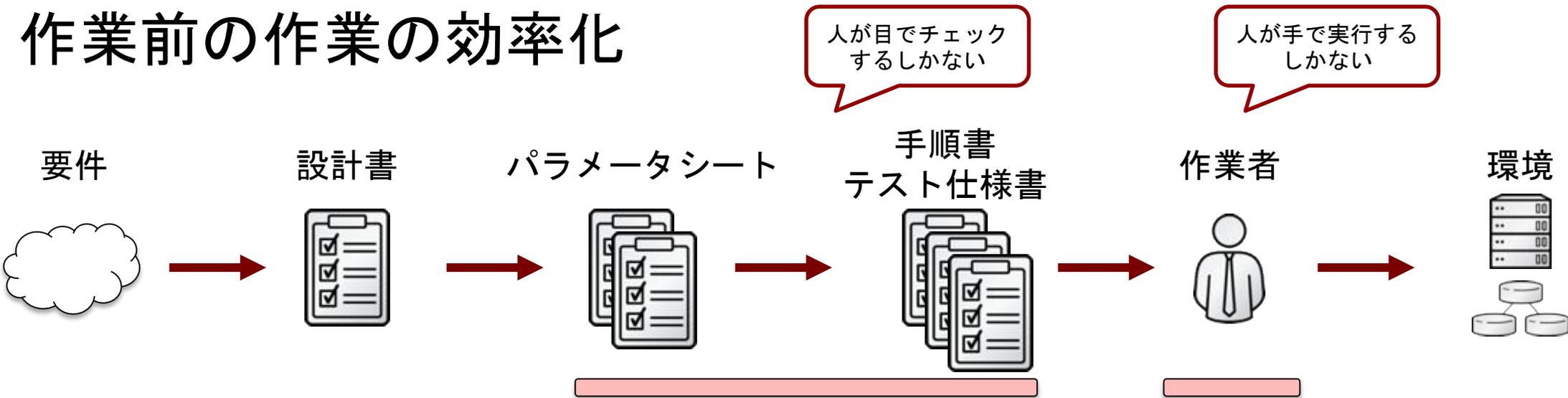


多数の自動化の対象をCMDBと連携して管理

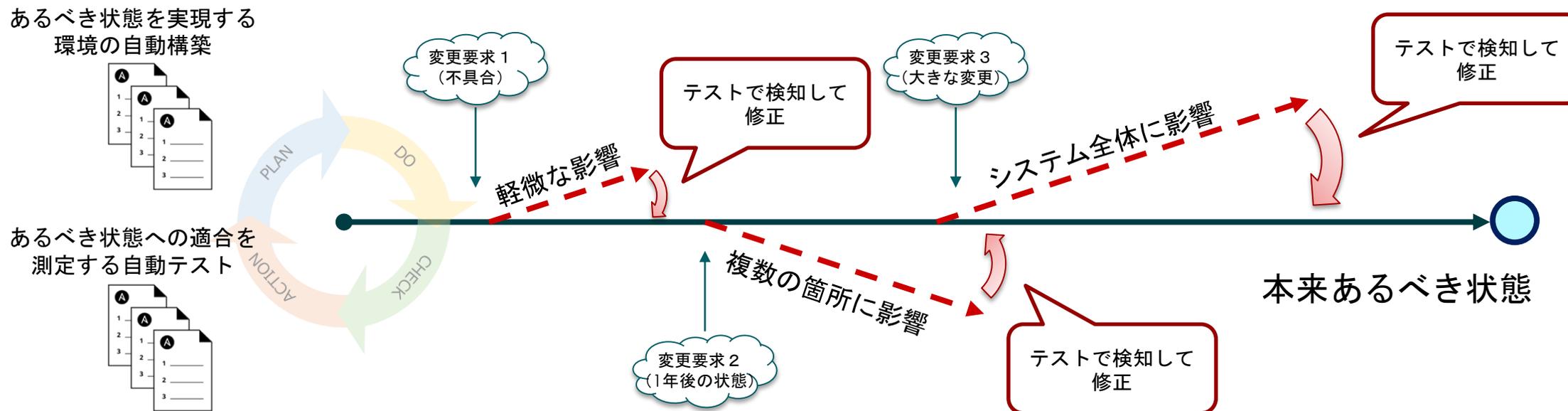
- 多数の機器の中から特定条件に合致する対象のみに自動化を「安全、確実」に実行する。
 - OSのバージョン、インストールされているパッケージ、特定のコンフィグが設定されている、など



作業前の作業の効率化



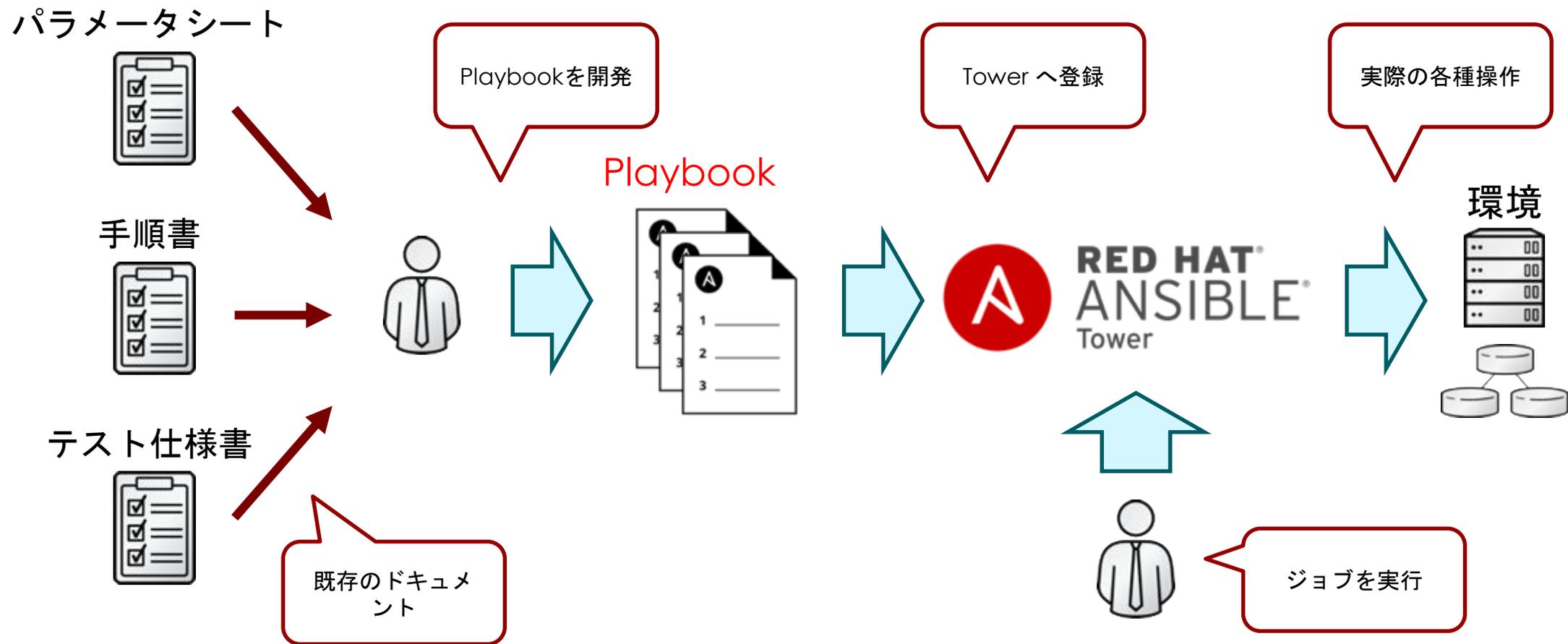
変化の影響度を測定しながら安全に作業



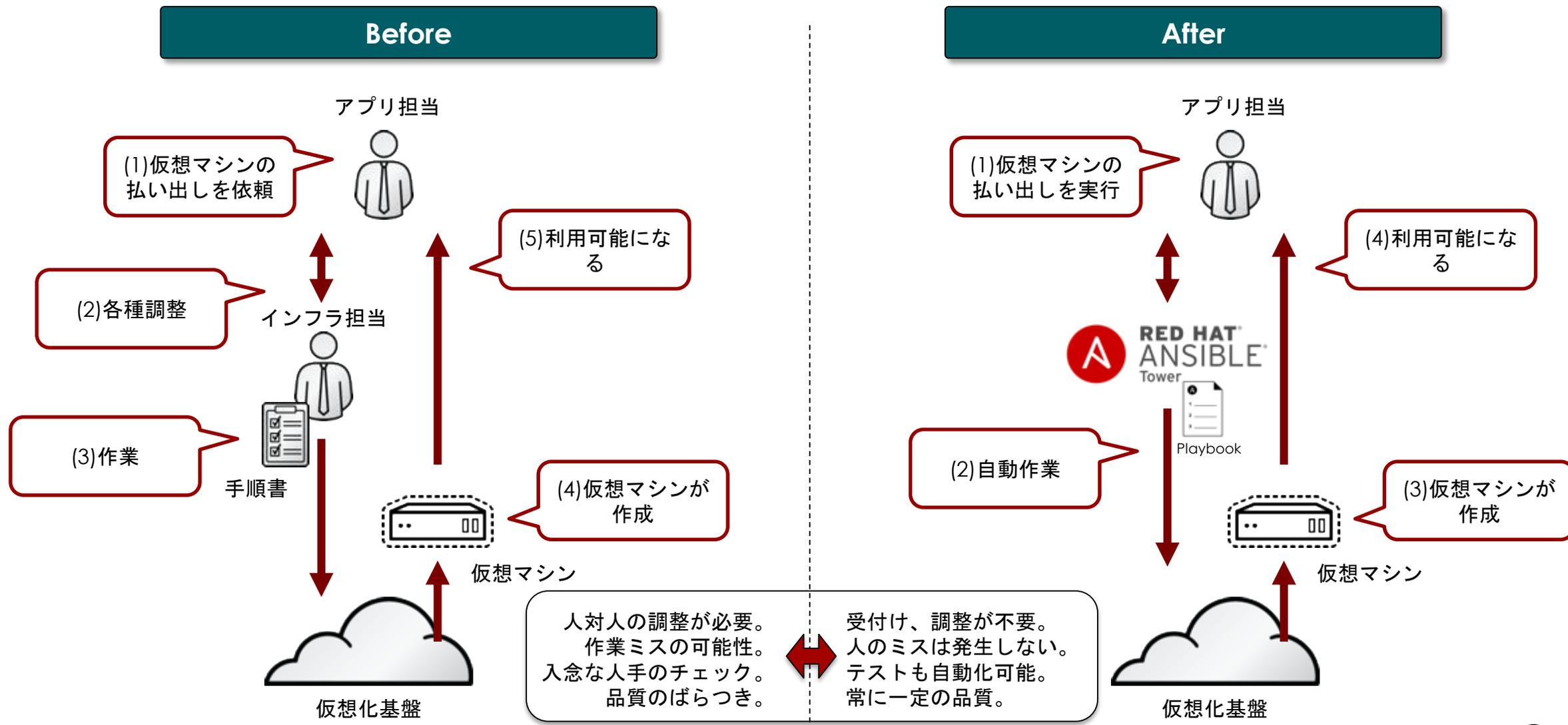
項目	初期状態	変更要求1の結果	変更要求2の結果	変更要求3の結果
テスト1	○	○	○	X
テスト2	○	○	X	X
機能1	○	○	X	X
機能2	○	○	○	X
性能1	100	102	110	30
性能2	200	210	80	110

活用イメージ

Ansible での自動化の流れ

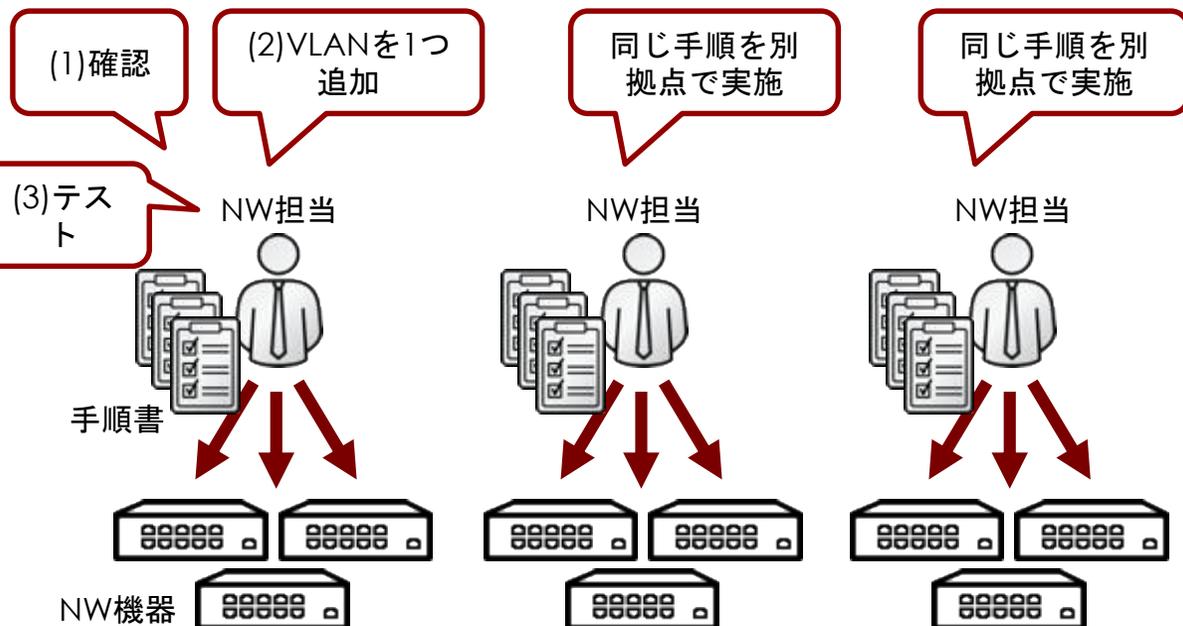


自動化例：仮想化基盤の運用改善例

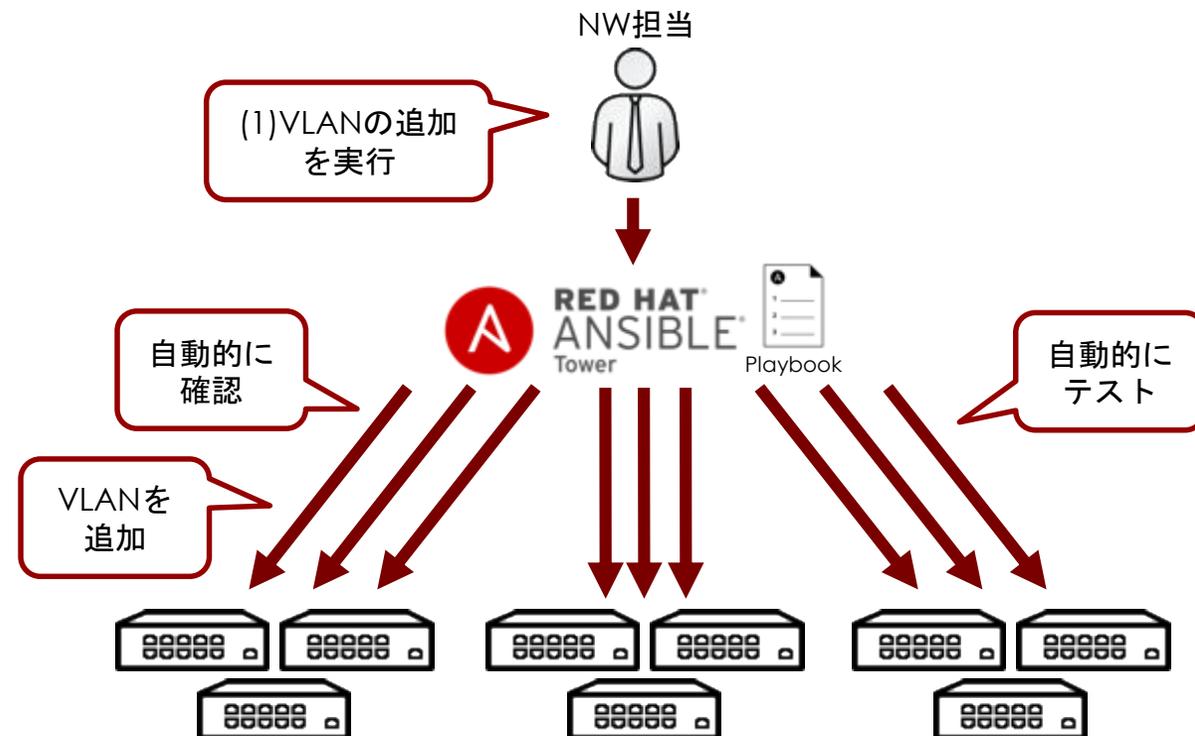


自動化例：ネットワーク管理の改善例

Before



After



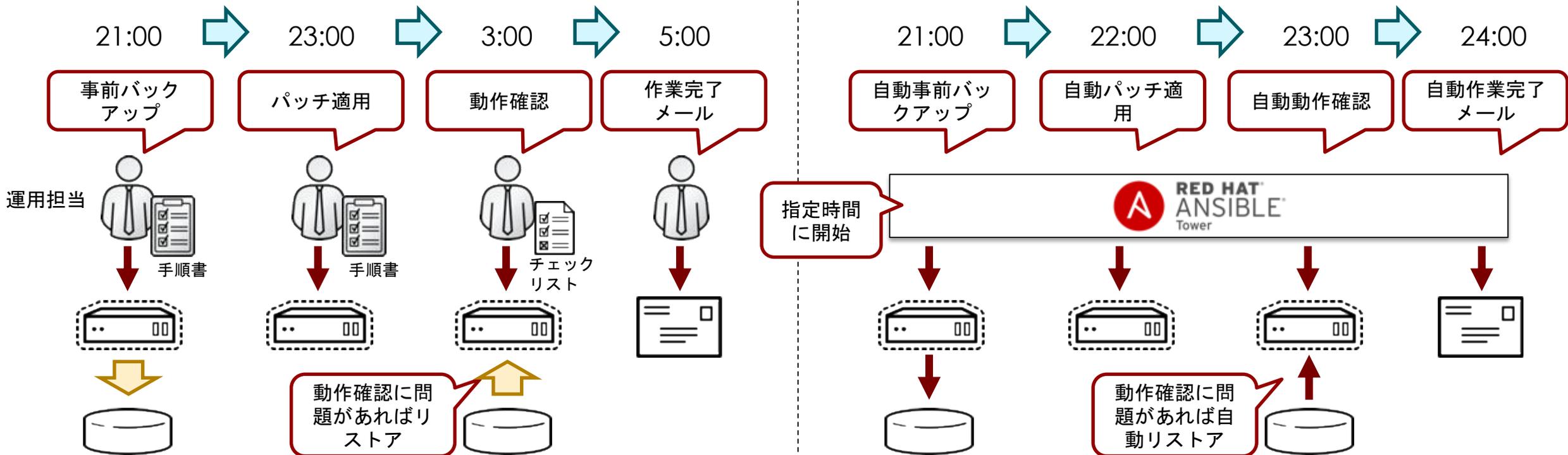
同じ手順でも繰り返し回数だけ工数がかかる。
事前の確認を入念に実施、ミスの可能性もある。
工数の関係上、限定的なテストしかできない。
品質のばらつき。

1つを自動化すると何回でもコストゼロで繰り返し可能。
自動的に事前確認が可能、人の見逃しは発生しない。
人には不可能な網羅的なテストが可能。
常に一定の品質。

自動化例：夜間パッチ適用作業の改善例

Before

After

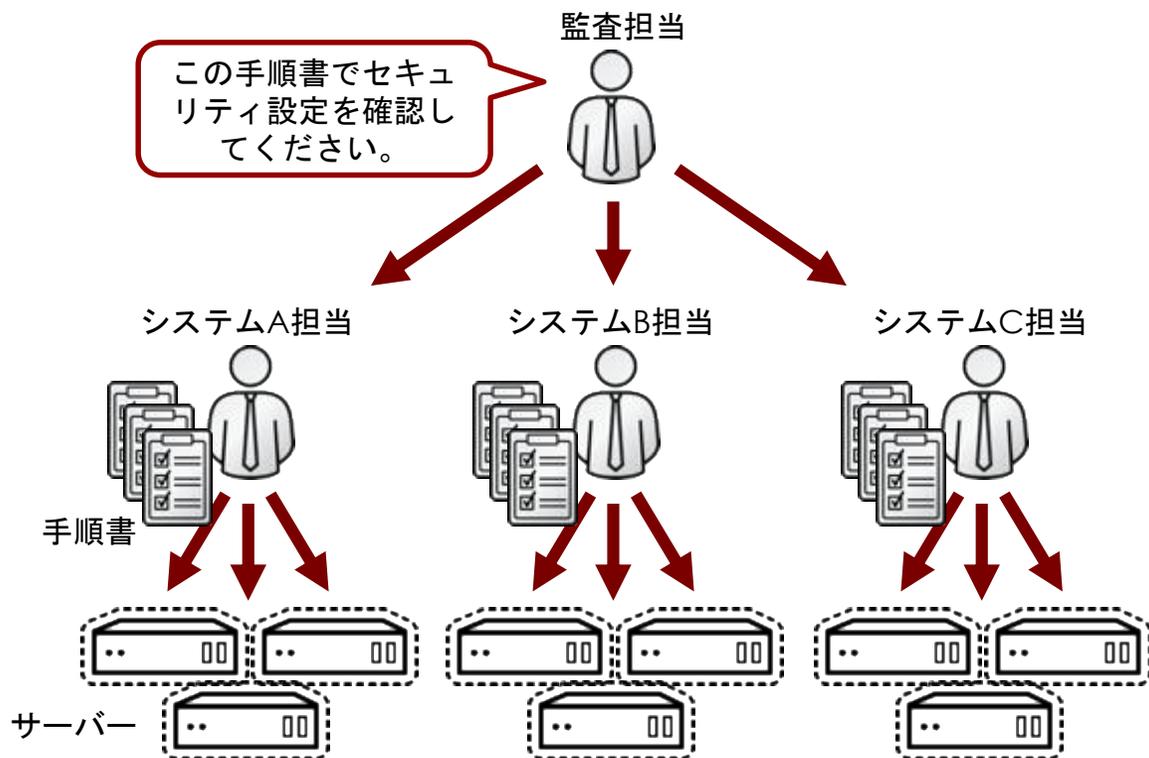


作業中に常に人が現地にいる必要がある。
 メンテナンスに時間がかかる。
 確認ミスや、リストアミスなどのリスク。
 品質のばらつき。

人は現地で待機する必要はない。
 メンテナンスの時間を短くできる。
 人のミスは発生しない。
 常に一定の品質。

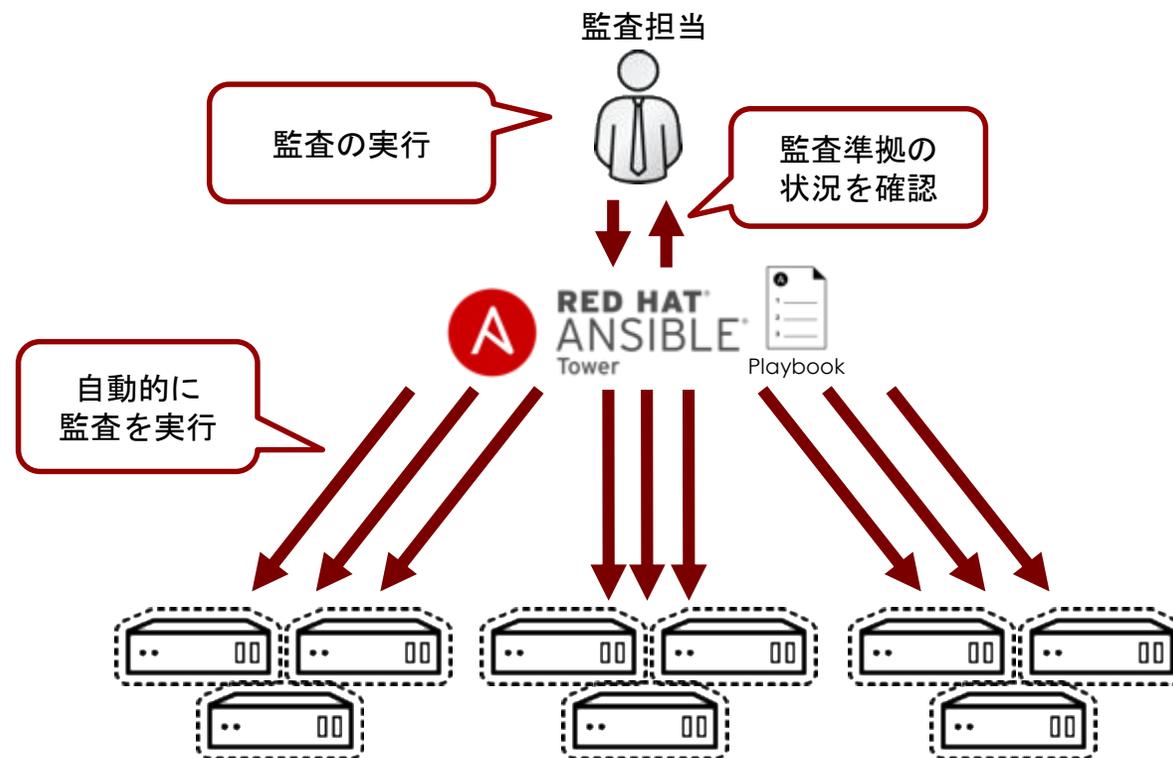
自動化例：セキュリティ監査の改善例

Before



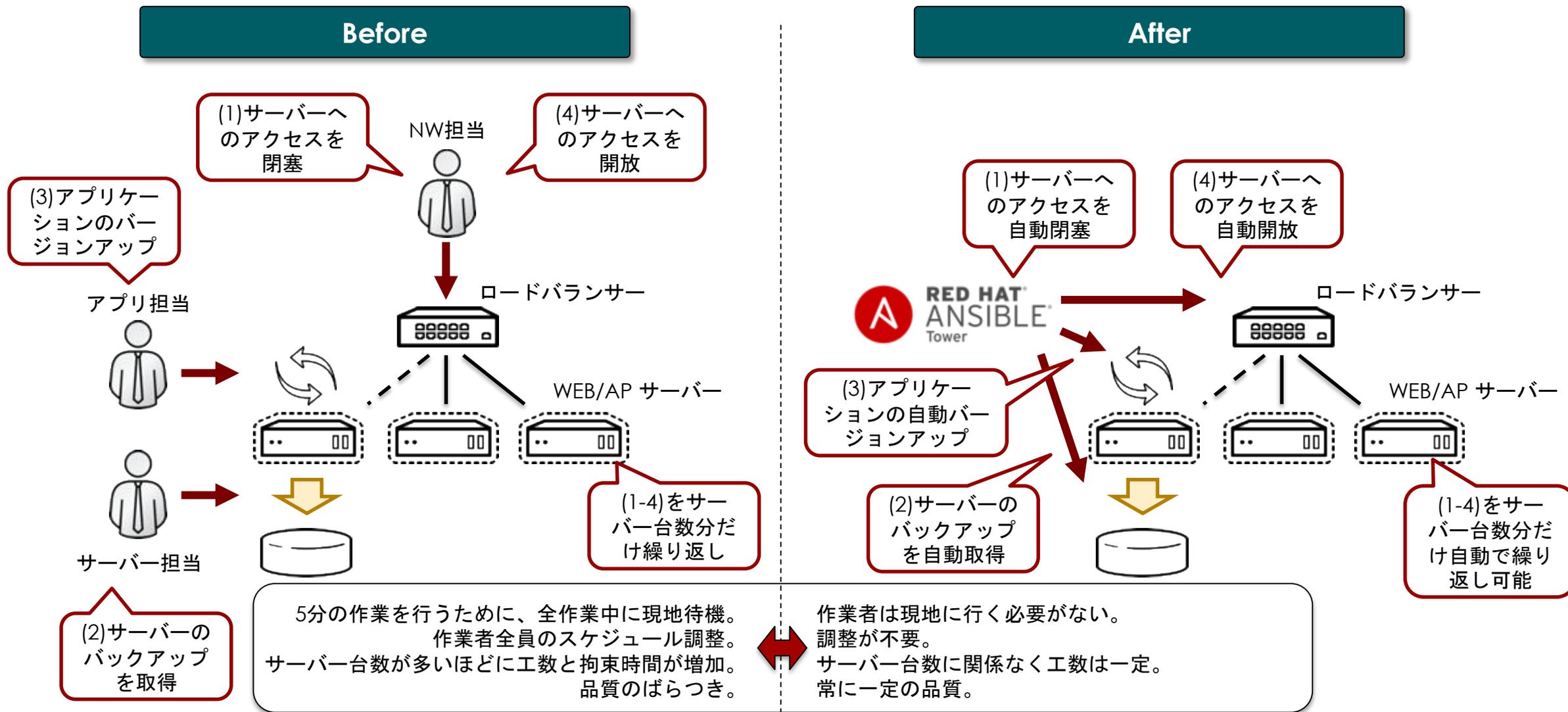
台数が多ければ多いほど工数が必要。
確認漏れや、確認者のスキルに依存したミス。
実行頻度が少ないのでリスクが増加。
確認の保証が難しい（上記のようなミス）。

After



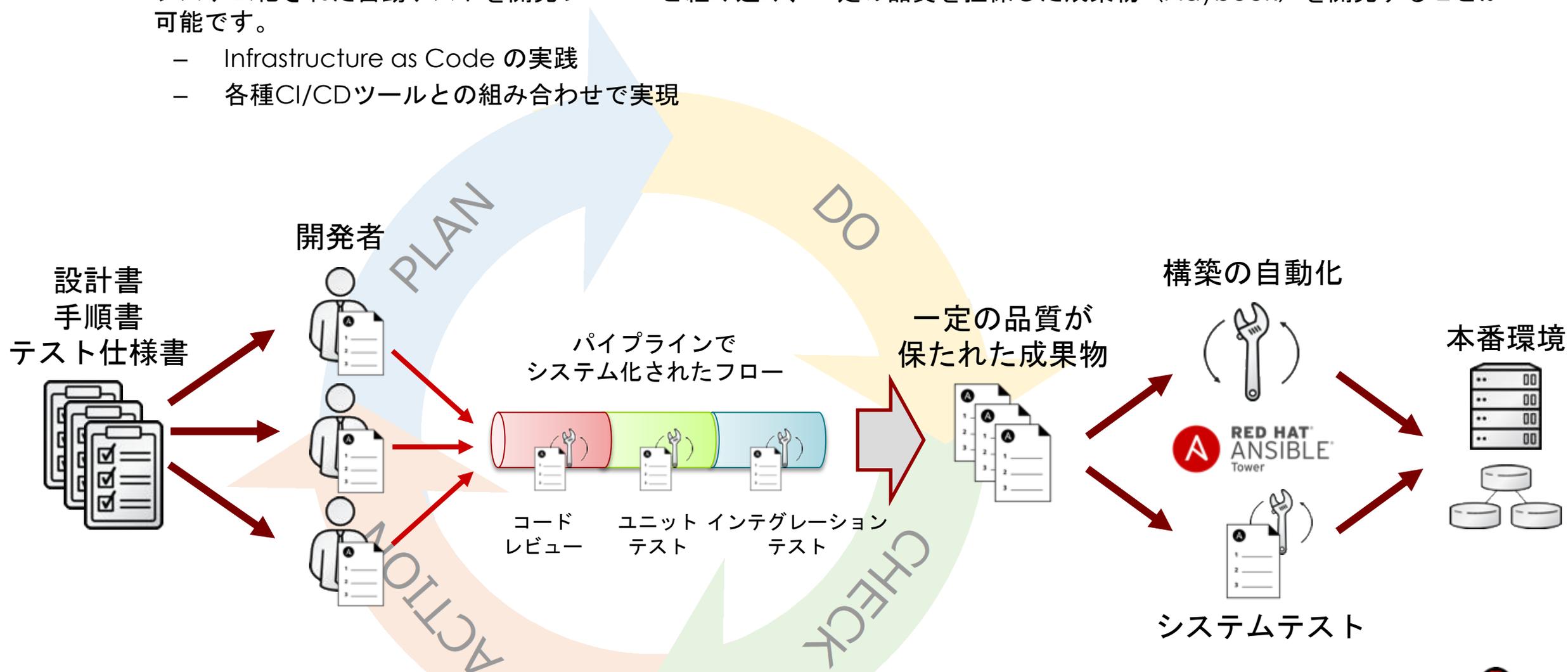
台数には関係しない。同じ確認を何度でも実行可能。
確認を確実に実行。
短い間隔で実行できるため、リスクを低減。
確実にチェックされたという状態が簡単に作れる。

自動化例：リリース作業の改善例



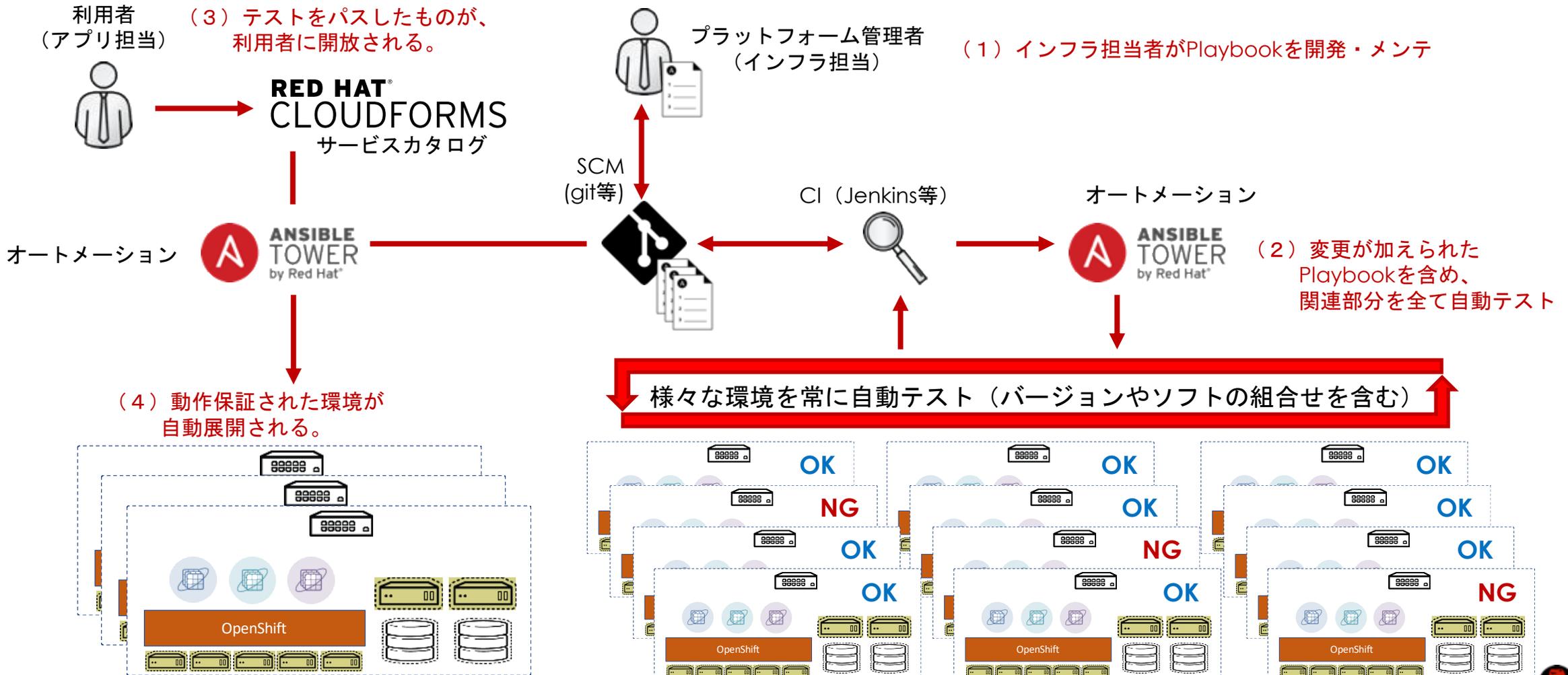
インフラのCI(CD)の実践例

- システム化された自動テストを開発フローへと組み込み、一定の品質を担保した成果物（Playbook）を開発することが可能です。
 - Infrastructure as Code の実践
 - 各種CI/CDツールとの組み合わせで実現

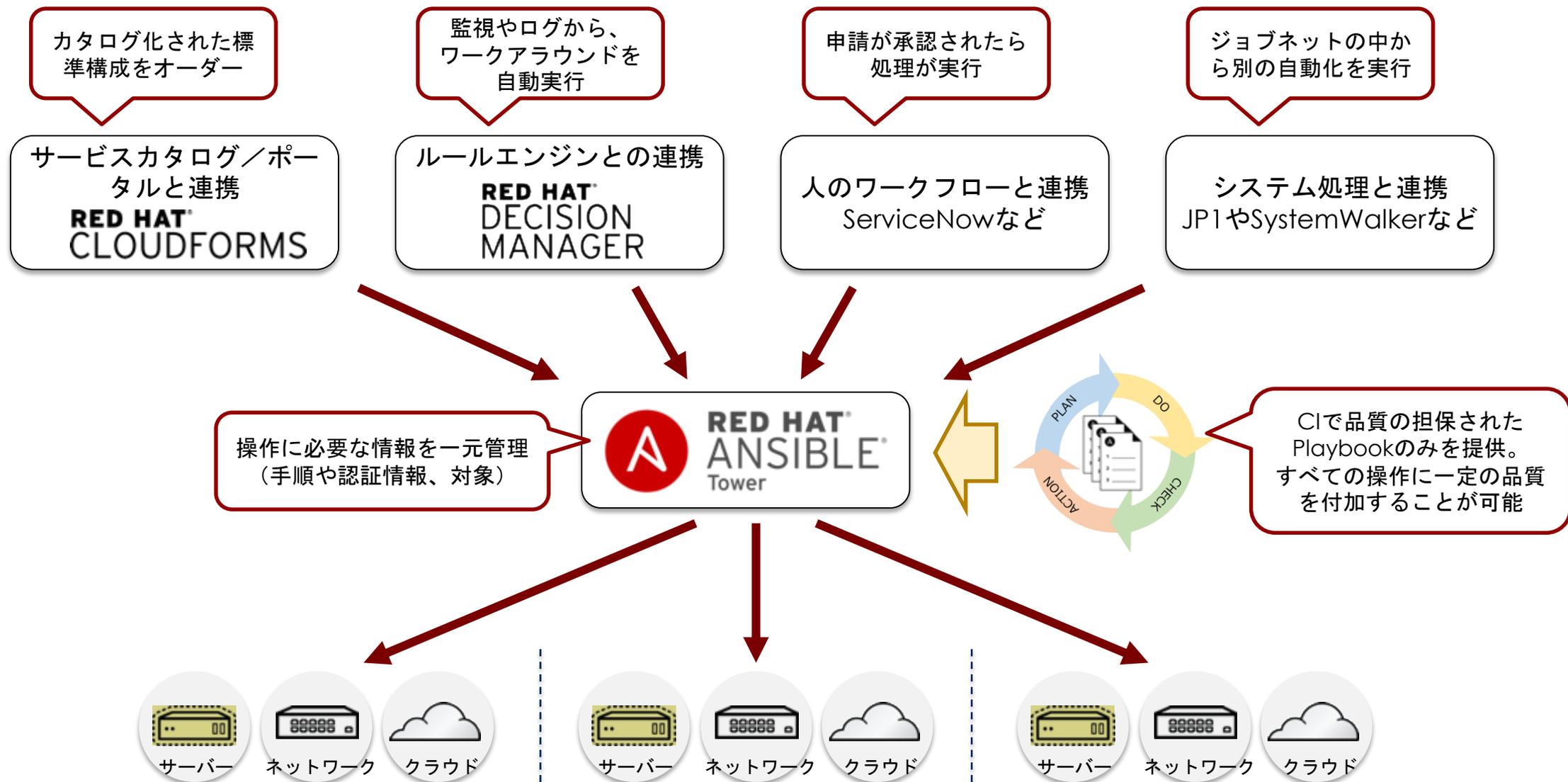


インフラの完全セルフサービス化例

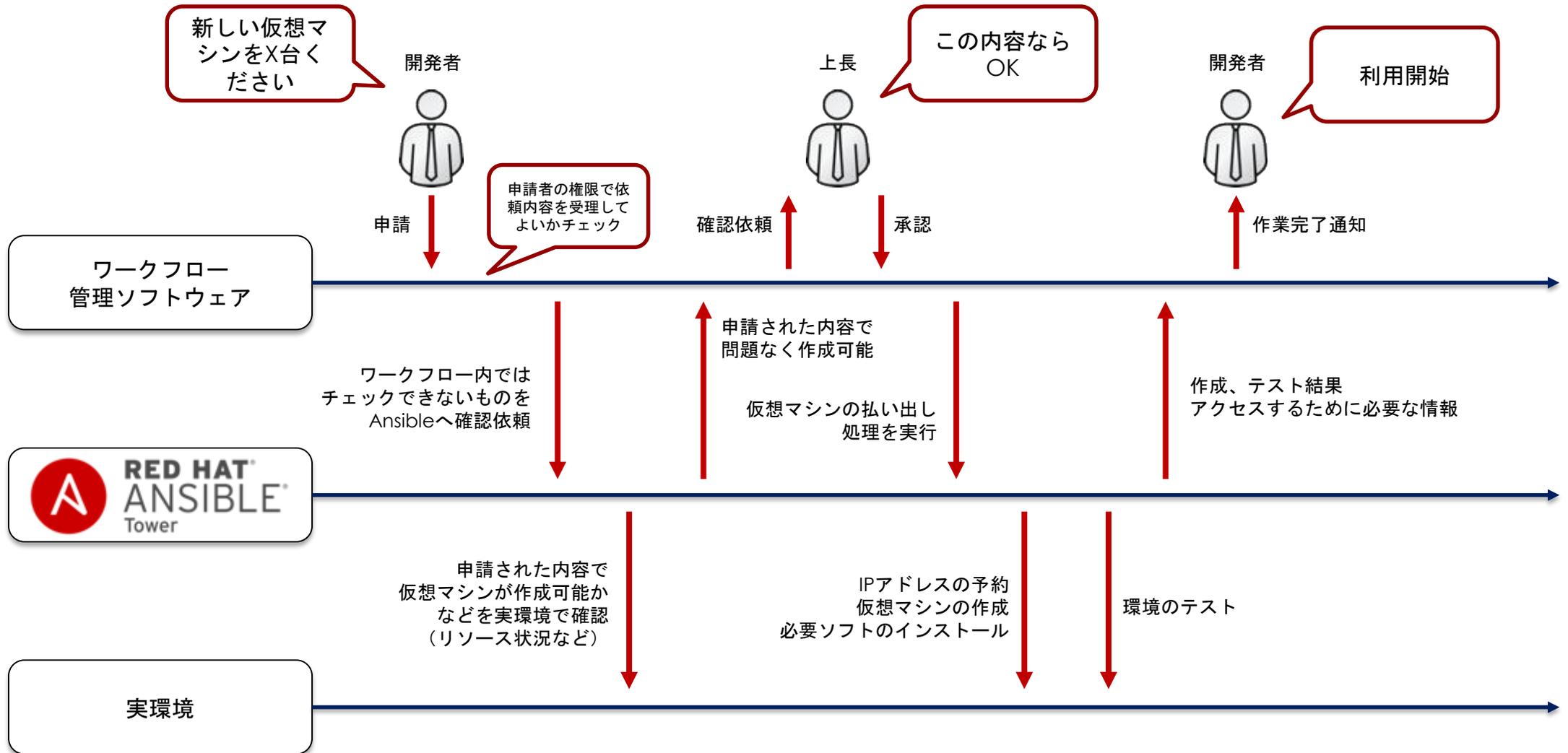
- 継続的な改善。環境変化への対応。Playbookの鮮度や品質の維持。



あらゆる自動操作のハブとして利用する例



組織のプロセス／権限と自動化の連携例



Ansible が適用できる課題例

#	課題例	適用例	コスト削減	スピードUP	品質向上	セキュリティガバナンス
1	インフラ環境にもDevOpsを適用したい	設計、構築、運用で発生する全ての作業をAnsibleで自動化し、かつ継続的に活用できるCICD環境を構築。	○	○	○	○
2	付加価値を生まない作業をなくしたい	パッチ適用や定期的なファイル更新の作業等をAnsibleで自動化し省力化。	○		○	○
3	ドキュメントを少なくしたい	手順書、パラメータシートをそのまま実行可能なPlaybookとすることで、ドキュメントの二重管理を廃止。	○	○	○	
4	作業に伴う社内プロセス（承認やレビュー）を緩和したい	人を前提とした作業のレビューをPlaybook化と自動テストで不要にして、社内プロセスによるオーバーヘッドを軽減する。	○	○		
5	作業ミスをなくし事故や手戻りを防止したい	作用手順を完全にAnsibleで自動化し、作業時の人手の介在を排除する。		○	○	○
6	本番と同等の検証環境を低コストで構築したい	本番環境を構築するためのPlaybookを検証環境でも利用可能にし、完全な同一環境を何度でも再現できるようにする。	○	○	○	
7	テストを自動化し毎回網羅的なテストを行いたい	人手で行われていたテストを自動化し、かつ人手では実行できていなかった網羅的なテストにも対応する。	○	○	○	
8	夜間作業をなくしたい	運用、メンテ作業をAnsibleで自動化した上で、スケジュール化し無人で自動実行する。自動テストも行い、サービスに影響が出る場合は自動切り戻しを実行。	○			
9	バラバラのツールを統一したい	Ansibleを自動化の統一インターフェースにして、全ての操作をAnsible経由で行うようにルール化。	○		○	
10	技術の共有と再利用をしたい	自動化の手法とドキュメントをPlaybookで統一し、学習コストを押さえつつスキルの統一と共有を可能にする。	○	○	○	
11	作業者に直接環境へログインさせずに運用を行いたい	全ての作業をAnsible経由で実施し、全ての作業ログをトラッキングする。			○	○
12	既に一部をAnsibleで自動化済み、これを全社展開したい。	作成済みのPlaybookを部品化して、メンバーで共有して利用可能にする。権限付与による安全性の向上。	○	○	○	○
13	既存の自動化ツールで対応できていない部分を自動化したい。	Ansible - 他ツールを連携させ、自動化範囲を拡大。自動化をAnsibleへ統合し、既存ツールを徐々に廃止。	○	○		



redhat.

Thank you for your attention!



plus.google.com/+RedHat



facebook.com/redhatinc



linkedin.com/company/red-hat



twitter.com/RedHatNews



youtube.com/user/RedHatVideos